

## 教育実習生の指導記 (国語)

落合 修一\*

今年の年賀状の中に、見覚えのある字の賀状がありました。前年度の教育実習生A君からのものでした。現在A君は高等学校の国語の先生としてはりきって活躍している様子が書き添えられてありました。教壇実習やみんなで教材研究している時のA君が思い出され、彼ならきっと充実した授業の展開をしているだろうと思いました。

教育実習の五週間は、私ども教師にとっても、四年生の大学生にとっても、緊張の連続でかなりきついものようです。

一日の生活は、私どもと同じに8時15分前後には登校し、朝のS・H・R指導から始まり、帰校は一応5時過ぎとなっていますが、この時刻に帰途につけるのは初めの週と実習終了のあたりの2・3日です。五週間の生活では、第一週は基本実習として学校教育についてと授業についての講話が続き、その間に授業参観が入ってきます。この間実習生は、遅刻をしないようにとか、H・Rの生徒の名前を早く覚えようとか、どうやって生徒の中に溶けこんでいったらよいか等の新しい環境に対してそれぞれ働きかけなければならない状況に置かれます。実習生間の情報交換も大きな位置を占めているようですが、単なる会話から、感想も入り交った会話や雑談が週の終りにはできるようになります。ただ、生徒と会話したり、ふれ合うことができる時間は、一日のうち何分もありません。始業前、休み時間、あとは放課後のクラブや部活動中ということになります。帰宅したあとは、

実習録の整理が主ですから、生活環境の変化からくる緊張を別にすれば、だいたい普通に睡眠できるようです。ただ話し合いの時間が、学級の生徒とあまり持つことができないだけでなく、担任の教師との時間もあまり無いのが現状で、短い時間の累積を期待する以外に方途はないようです。

第二・第三週に、いよいよ教壇実習が開始されます。実習生は教科のそれぞれの学年に配属され、それぞれの先生から指導を受けます。国語科では現在、説明的文章と文学的文章の二つをこの期間に教壇実習をします。最初は学年ごとに説明的文章の教材研究から入ります。この教材研究と一時間目の指導案ができあがるまでに実習中のエネルギーの半分がつかわれてしまいます。教材分析も全部やってしまうなくてはならないし、全体の指導計画も立てなくてはならないし、そして明日教壇に立たなくてはならないし、という条件がかなり厳しくなります。学校で指導できる時間も限られていますので、いきおい実習生は家での研究や作業になります。この頃睡眠不足になるのでしょうか、夕方からの研究会でうつらうつらする実習生が見られてきます。寝不足の赤い眼で教科書を開いている実習生もおります。毎年この時期になると、もっと効率よく短時間で教科の導入指導ができないものだろうかとか悩み反省するのですがいざ実習に入ってしまうと、同じパターンになってしまいます。例えば、要点をまとめるために、どのように内容をおさえ、どの語句を中心にする

\* 岩手大学教育学部附属中学校

か、そしてどのように要点をまとめるかという教材分析の時に、説明的文章の一般的理論と、具体的なこの教材での中心語句はどれか、この要点はこうまとめようという作業に入るのですが、時間短縮のため、要点はこうですと実習生に指導してしまうと、教壇の上で実習生は生徒に対して同じように一方的な授業を展開してしまいます。だからどうしても教材分析では実習生にもじっくり考えてもらいたいために時間をかけなくてはならないところです。教材分析に比較して指導案づくりは割合円滑に進めていくことができます。ただ、実習生のノートには指導案がぎっしり書き込まれており、教師は割合案にこの項は通過できますが、実習生にとっては、やはり時間をかけなくてはならないことのようにです。

四週目には、隔年に全研と学研があり、これに向けて、三週の終りごろから準備に入ります。当日の授業者を中心に、実習生全員で教材研究にあたるわけですが、6時ころまでは、現在受け持っている授業の指導を受けたり研究をし、その後で学研や全研のための全員での研究会がもたれます。説明的文章で教材分析の方法や指導案の作成をやってはいるのですが、今度の文学的文章の教材分析となると、要素が異なってくるので、やはり最初からの指導になります。次に発問のしかたの指導になります。この期間に残っているエネルギーの大半が使われてしまいます。実習生にとっては一番つらい時期です。夜遅く帰って疲れた頭で次の日のための教材研究と準備、そして遅刻しないように起床するのですから、並大抵ではないようです。さらに一日だけであれば何とかなるのですが、4・5日続くわけではほとんど睡眠時間はとれないのではないかと思います。全研学研の前々日あたりから役割り分担で、授業者を除く全員で印刷作業にとりかかります。前日のかなり遅い時間に、あすの授業のリハーサルをやって発問、板書等まずい所を修正します。当日は授業と研究会で教育実習の山場を終えます。この間実習生た

ちは緊張のし通しですが、とくに、学研で他教科からの素朴な、かつ基本的な質問や意見が出された時には、教科の中にうずもれていた自分たちにとって目ざましの薬となります。この週で痛切に感じることは、実習生の研究のための時間が不足だということです。どれだけ時間があれば充分かということについては答えることができませんがある程度納得できる教材分析ができる時間が保障できればよいのですが、現状では睡眠時間を削ってそれにあてている状態です。物理的な時間の余裕が無理とすれば、実習生に対する指導の効率化と指導内容の分散が考えられます。指導の効率化といっても現在は何となくこういうやり方でやろうという程度の勘にたよっての方法でしかないところに私たち国語科教師の課題がありそうです。来年度は、今までの指導方法をまとめて実習生に提示できるまで進めてみたいと考えています。一年ごとに実習生・教材・教師の関係の中での条件は変化していくことは予想されますが、いくぶん効率的に指導できそうです。また、指導内容の分散については、実習期間五週間の中では限界があります。とすると、教材分析なり指導案づくりなりの基本を学部講義の中に組み入れて行くことが望まれると思います。また本学でも今年度から実施されている教員養成実地指導講師（私自身も11月から12月にかけてその機会を与えられました）の運用にもこうした面への配慮がなされねばならぬと思います。

以上主として実習の四週間について書いてきましたが、実習生の全員が終了の時には、もっとやりたい、短かかったと感想を述べています。毎日準備して教壇に立って、教育に携わる喜びを感じとっているのではないかと思います。私たち教師も肉体的にはかなりつらい期間ですが、それだけに冒頭のような場面に出合うことが楽しみの一つとなります。最後に、もっと多くの学生が、岩手の先生になってもらえるよう期待して結びとします。